



平成26年6月2日
卓話『秀吉 醍醐の花見』

総本山醍醐寺103世座主 三宝院門跡
RI第2750地区 パストガバナー
東京港南ロータリークラブ

仲田 順和 様



私が2004～5年の2750地区のガバナーを勤めましたとき、浅田さんが面白いことを社会奉仕でやってらっしゃったんです。「施しはいいよ 仕事が欲しい」というキャッチフレーズで、ハンディキャップのある人も納税者になろうという運動でした。私は非常に興味を持ち、これは2年、3年続けた方が実る話だと思い、浅田さんに社会奉仕委員長をもう1年とガバナー補佐をして欲しいとお願いしました。そうしたら浅田さんは、今、クラブの拡大を考えているんだけど、拡大とガバナー補佐とどっちがいいって私に言うんですね。それでクラブが拡大されることは一つ奉仕の起点が決まることだから、是非クラブ拡大をとお願ひしまして、浅田拡大補佐の元に六本木RCが生まれたんでございます。私には非常に印象深い2004年11月22日でした。

設立総会のあと、年が変わって1月24日にチャーターナイトをいたしました。その時に本当に私は、六本木RCにすごい思いを寄せました。2004年12月26日はスマトラ沖の地震で大きな津波がございました。1月24日にこちらへお伺いしたら、設立記念としてスマトラ沖地震に支援金を出すことをお決めになりました。私は当時ガバナー会の議長をしておりまして、全日本のロータリーに六本木RCの設立と同時に義援金をいただいたことをお話しし、そこで大きな奉仕活動ができました。六本木RCの出だしは未来へ向かっての懸橋でございました。その時にもお話ししたんですが、未来は遠くにあるんじゃないかと今ここにありと、そして出番を待っているんだと。この出番に触れることが私たちに非常に大切だということをつくづく感じました。そして個人的にも、大変自分の中で、楽しみ、気持ちを鼓舞させ、ほほ笑むような言葉を浅田様から頂きました。挑戦することの快感という言葉でございます。私も10年間、文化財の保存とか、いろいろなことに挑戦し、その快感を味わわせていただきました。

私は醍醐寺に勤務し、醍醐寺の二百万坪の土地と七万五千点を数える指定文化財の管理に努めております。奈良から京都に遷都された頃、京都には羅生門を中心に東寺、西寺が建てられ、さらに大覚寺や仁和寺が建立されました。これらのお寺はどちらかとい



うと官立的なお寺です。醍醐寺は聖宝というひとりの僧侶の個人的な、命に対する祈りを中心とした寺でございます。醍醐寺の建つ地域は醍醐天皇の母方の出身地でございます。醍醐天皇は母方のおじいさま、お母様の勧めで醍醐寺の准胝観世音菩薩に願を掛けられました。そして皇后との間に二人のお子様がお生まれになり、その命を大切にするために、人々の病を癒し心を癒すといって薬師如来をお作りになりました。さらに不動明王を中心として5体の明王をお祀りし、命と心に力を持って頑張るって行かなきゃいけないという祈りをなさいました。醍醐寺は今もこの3つの祈りを中心に維持管理いたしております。

そのような寺でございますが、今日の姿からはとても想像のできない浮き沈みがございました。官立ではないのに国の指導者との関わりがございました。醍醐天皇、白河上皇に始まり、源氏、北条、そして足利尊氏らの信心を得て参りました。応仁の乱ですっかり焼け野原になり、五重塔一基が残るだけでございます。丁度その頃、天正年間に入って秀吉が醍醐寺にこられました。秀吉が何故醍醐に来たのかということは余り知られていません。醍醐寺は観音経の教えとして、人間は生きとし生けるものの命をいただき、多くの人々の心をいただいている。だからいただきっぱなしではなく、どこかへお返ししなければいけない。それを探るのが日々の生活だという考えでございます。そこで聖宝理源大師

はご自分でそれを示されました。鎌倉時代の重源というお坊さんも60歳になって醍醐から奈良へ行き、焼かれた大仏殿を再興しました。叡尊という方も西大寺を開き、ハンセン病の方々のために大きな館を建て、そこで癒したというようなことがございます。秀吉も全くそれを地で行ったんでございます。秀吉の時代、天正13年の頃ですが、醍醐寺の座主は義演という方でした。義演座主は二条家の出身です。お気付きかと思いますが、二条家の関白の称号を秀吉は譲り受けたわけでございます。天正13(1585)年7月、二条昭美から関白の称号を受けることが決まり、秀吉は醍醐寺を訪れて義演座主に醍醐寺を復興したいという願いを出されました。秀吉は二条家から受けたその心を関白の弟である義演座主を通じて醍醐寺に返されたわけです。1596年から五重塔の修復が始まり、秀吉も度々その様子を見に醍醐寺へ来られました。そのうちに桜が大変きれいだということから、普段、城にこもりがちの女房たちがこの桜を見たらさぞかし気も晴れるだろうということで、醍醐寺でのお花見を決められました。それが慶長3(1598)年でございます。わずかの間に秀吉は五重塔を完成し、紀州から、今、国宝になっている金堂を移し、また仁王門を建立しました。更には三宝院の庭園や御殿の作りを指導されました。でもお花見までには三宝院は完全にはできあがりませんでした。

秀吉はこの花見をするのに北政所、淀君はもとより700人の女房の方々を連れて行くことにしました。武将が加わって、当日は1300人程の大きな花見でした。このときにも一つ隠れていることがございます。この700人の女性に3度着替えさせろという命令です。ですから武将は大変でした。西陣でこれを全部調達しましたので、京都の街で秀吉の悪口を聞くことはございません。今の言葉で言

えば地域産業の興隆だったかもしれません。花見は本当に絢爛豪華で、今、その品物はそのまま残っております。醍醐寺にとってはどちらかというとお遊びの道具ですから余り手を付けておりません。金の天目茶碗もございませぬ。金で重いと思うんですが、持ちますと軽くて、そのうえ熱が伝わらないように作られております。お茶道具一つにしてもそれだけ気を入れたのだから、さぞかし女性のお召しものは綺麗だったろうと思います。700人の女房は大変喜んで、秀吉は今度は秋に紅葉狩りをしようと言い、醍醐寺に銀300枚を置いて、秋までに三宝院の庭をきちんと直し、御殿を作りなさいと命じました。醍醐の花見は余りにも有名で醍醐はもう桜だと決めつけられていますが、秀吉が思いを込めて作った三宝院の庭は秋仕立で、紅葉の時が大変きれいです。秀吉は紅葉狩りを楽しみにしていたんですが、その年の8月に亡くなりました。ですから人知れず三宝院のその築庭されたお山の上に豊国稲荷大明神という秀吉をお祀りした小さなお社がございませぬ。また秀吉がお茶を好んだことから枕流亭や松月亭というお茶室を作り、秀吉の徳を偲んでおります。

来年、三宝院ができて900年になります。それに向けてお庭を整備し、三つのお茶室もきれいに整えました。是非みなさま見てください。そしてお茶をお点てになる方がいらしたらお点て下さい。醍醐寺でお道具を全部揃え、お菓子も点心も揃えます。よくそのお話をすると、お道具は持っていきますとおっしゃるんですが、お道具を持ってこられませぬと醍醐のお道具と混じってしまつて困りますので、それはお断りしますが、お召しものを着替える部屋も用意しておきます。よろしかったらどうぞ。

こんなことをしながら醍醐寺の文化財の伝承にも力を入れております。デジタル化の時代で、文書をデータベース化し、仏像の立体採寸もいたしました。ワコールでは女性の採寸をノー接触ですということをお聞きましてワコールにお願いし、国宝の吉祥天をお持ちしました。そうしたらものすごい笑い声が出たんです。何か失敗したかとびっくりしたんですが、流石女性の採寸でございます。スリーサイズが生まれて、それで翌日の新聞には「醍醐寺3Dシステムで仏像の立体測定に成功」「平安の美は101,105,102のずん胴」と出ておりました。そんなことも楽しみながら醍醐寺におります。

今日は粗辞でございましたが胸詰まる思いをしながら卓話をさせていただきました。ありがとうございました。



秀吉が築庭した三宝院の庭